九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国・黄土高原の結婚式 ： 伝統と変容の一断面

賈, 瑞晨
中国科学院水利部水土保持研究所

佐藤, 廉也
Department of Environmental Change, School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

縄田, 浩志
Department of Environmental Change, School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

松永, 光平
九州大学大学院比較社会文化研究院環境変動部門/ 総合地球環境学研究所

他

https://doi.org/10.15017/19589

出版情報：比較社会文化. 17, pp.17-35, 2011-03-20. Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化』第17号（2011）17～35
Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
vol.17（2011），pp. 17～35

論 文

中国・黄土高原の結婚式
――伝統と変容の一断面――

Marriage and wedding ceremony of a village in Loess Plateau, China: As a description of changing/persistent tradition

2010年11月9日受付，2010年12月20日受理

賈　瑞晨[i]・佐藤　廉也[ii]・縄田　浩志[iii]・松永　光平[iii]
劉　国彬[i]・張　文輝[iv]・山中　典和[v]

Ruichen JIA[i], Ren'ya SATO[ii], Hiroshi NAWATA[iii], Kohei MATSUNAGA[iii]
Guobin LIU[i], Wenhui ZHANG[iv], Norikazu YAMANAKA[v]

要　旨

経済成長に伴う貨幣経済の急速な浸透によって、中国内陸部の農村における物質・社会生活は激しく変容している。こうした背景のなかで、本稿は中国・黄土高原の農村における一つの結婚式を取り上げ、その縁談成立から挙式までの詳細を記述することによって、現代中国農村における伝統と変容の一断面を明らかにし、考察の材料を提供することを目指した。結果として、貨幣経済の浸透によって結婚式は豪華かつ派手になったことにより、婿方の出費は膨大となり、借金の返済が出稼ぎ流動を促す大きな要因となっていることが明らかになると同時に、一方で嫁取り婚・夫方居住や男児偏重の傾向、さらには村の互酬的な人間関係が基層的な社会関係として持続している様相が浮かび上がった。

キーワード：結婚、伝統、社会変容、黄土高原、中国

1　はじめに

本稿は、中国・黄土高原の農村で2010年1月に行われた一つの結婚式に焦点をあて、その縁談の成立から挙式までの一部始終を詳細に記述し、そこに表れた伝統と変容の諸相を浮き彫りにすることによって、現代中国北部農村の社会変容を考察するための資料を提供することを目的とする。

20世紀後半期以降の中国農村は、文革期の土地改革と農業集団化、それに続く1970年代末期以降の改革・開放路線による急速な市場経済化を通じて、主として上からの政治改革によって大きな社会経済変化を経験してきた。とりわけ1990年代末期以降の急速な経済成長と、それに伴う経済格差の解消を目指した西部大開発政策をはじめとする農村開発政策によって、黄土高原地域を含む内陸部の都市・農村は急激な変容を遂げつつある（佐藤ほか 2008; 関ほか 2009）。

筆者らは、2005年以来、本稿の対象地域である陝西

[i] 中国科学院水利部水土保持研究所
Institute of Soil and Water Conservation, Chinese Academy of Sciences and Ministry of Water Resources
[ii] 九州大学大学院比較社会文化研究院環境変動部門
Department of Environmental Change, School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
[iii] 総合地球環境学研究所
Research Institute for Humanity and Nature
[iv] 西北農林科技大学
Northwest Sci-Tech University of Agriculture & Forestry
[v] 鳥取大学乾燥地研究センター
Arid Land Research Center, Tottori University

省の延安市近郊農村において村の土地利用変化と経済変容に関する調査を続け、わずか数年間のうちに大きく変容する延安の都市部や農村の姿を目の当たりにしてきた。人口約200万人の一地方都市であった延安では、都心部には複数の高層ビルが新たに建ち並び、洗練された服装の若者たちが街を歩くようになった。村の暮らしにおいては、伝統的住居の窰洞（ヤオトン）（横穴式洞窟住居）に換わって煉瓦造りの新しい住居が目立つようになり、電気洗濯機や薄型テレビなど、訪れるたびに新たな工業製品が家庭の生活アイテムとして加えられていった。都市部の発展に刺激され多くの若者たちが出稼ぎに出るようになったこととも関連する、村におけるこのような物質生活の変化は、冠婚葬祭を含む村の生活慣習にも大きな影響を与えていると予想される。

もちろん、中国農村部における生活慣習の変化は近年に限ったものではなく、高度経済成長を遂げつつある近年にのみ「伝統と変容」という図式を単純にあてはめることには問題がある。20世紀以降の中国農村は、とりわけ文革期から改革・開放期にかけて、村の組織、土地制度、土地利用や農業、宗教・家族形態に至るまで、大きな変容を経験している。結婚や家族制度に関していえば、父系の拡大家族を基本とし、父権が強く男児偏重の価値観を持つととらえられてきた中国北部農村も、国民党政府による結婚・家族制度改革の影響を受けて1930年代前半期には既に変わり始めている（末次 2000）[i]。共産党政権の成立後には、文革による土地所有の集団化により、従来の財産の継承が大幅に制限されることにより、拡大家族の父権が弱まり核家族化を促すことにもなった。こうした社会変革のなかで、童養媳（トンヤンシー）（幼女を家に引き取り、年頃になると妻にする結婚形態）のような慣習や、完全に親と媒酌人によって決められ、結婚式当日まで互いに顔を合わせることがないといった伝統的な慣習は徐々にみられなくなっていった（中生 2000; 末次 2000）。また、末次（2000）によれば、文革期には、結納も嫁入り道具もないきわめて簡略化された「新式」と呼ばれる結婚式が流行したという。

これに対して、改革・開放期以降は「新式」の結婚式はすたれ、結婚式は豪華かつ派手になり、結納金の額も上昇していることが指摘されている（末次 2000）。結婚式が派手になり、その費用が増大しつつあるだろうということは、近年の村の貨幣経済や物質生活の急激な変容をみれば十分に予想できることである。その急激な変容下にある結婚式の「一断面」を記録しておくことは、現代中国農村における社会変容を考察するにあたって一つの参照枠を提供することになるだろう。末次（2000）はまた一方で、男児偏重や父権的な慣習が時代を通じて色濃く残されている点も同時に指摘している。表面的な慣習が急激に変容するなかで、変わらずに持続する文化伝統はどのようなものであろうか。それらを見きわめることによって、中国農村の基層的な構造を考察する端緒になるかもしれない。本稿はそのような目論見によって書かれたものである。黄土高原の結婚式に関連する文献としては、援助プロジェクトの関連で村人と縁のあった日本人の新郎新婦が黄土高原の村で「伝統的な村の結婚式」を挙げることによって、村人が自らの伝統に目を向けるきっかけをつくることを目論む興味深い試みもある（深尾ほか 2005）。これに対して本稿は、変容の過程にある結婚式をそのままに記述することによって、伝統と変容のただなかにある現在を、不完全ながらも見極めようとする試みである。

以下、次章で対象とする村と家族、および調査の概要について述べた後、第三章で縁談の成立と式の準備について、続く第四章では結婚式の顛末を詳しく記述する。最後に第五章において、結婚と結婚式をめぐる伝統の持続と変容について、簡単な考察を行いたい。

2　北宋塔村と郝さん一家

本稿の対象となる婿方の家族は、黄土高原のほぼ中央部に位置する陝西省安塞県高橋郷北宋塔村に住む。北宋塔村は延安市北西の北緯36度40分、東経109度12分の位置にあり、延安市からは車でおよそ１時間の距離にある（図１・２）。村は2005年の世帯調査時点で23世帯、95人が住む小さな自然村であり、若い世代は2000年以降、村外に仕事を求めて延安市などに居住したり遠隔地に出稼ぎに出た人々が多く、調査を開始した時点で30歳代以下の若い年齢層は少なかった。

村の伝統的な生業はアワ・キビ・ダイズ・ジャガイモ・モロコシ・トウモロコシ・コムギなどを栽培する天水農業と、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ロバなどの牧畜やブタ・ニワトリなどの飼養であった。平地の少ないこの地域では、斜面に窰洞（ヤオトン）（横穴式洞窟住居）を構えて集住し、周囲の斜面でアワ・キビ・コムギなど、谷底でトウモロコシを栽培し、谷部の草地などを利用して家畜の放牧を行ってきた（写真１）。しかし、1999年に生態系保全を目的とする退耕還林政策が政府の主導で開始されると、急傾斜地での耕作や家畜の放牧が全面的に禁止され、換わって斜面には大規模な土木工事によって段畑が造成され、政府の補助で野菜のビニルハウス栽培が始まるなど、生業様式は大きく変化した（写真２）。一方で経済成長は都市部への若年人口の流出を促し、中学校を卒業した若者の多くは延安近郊に住み、商店などの従業員や

建築・土木関係の仕事に従事したり、あるいは国内の遠隔地の工場などに出稼ぎに出た。

著者らは2005年以降、北宋塔村において退耕還林開始後の土地利用・世帯経済変化に関する調査を継続的に行ってきた。村での調査に際しては、2005年当時、農業を営みながら村長をつとめていた郝(ハオ)玉宝さん（当時44歳）一家に、食事や村人への仲介などのお世話になった。郝さんは当時妻と実母との３人暮らしで、子供は４人（長女・長男・次女・三女）いたがいずれも2005年当時は同居していなかった。三人の娘のうち、長女は既に結婚して近隣の他村に住んでおり、次女は2005年には独身だったが、その後近隣の村出身の男性と結婚して2010年１月現在は夫と二人で延安に住んでいる。三女は2005年当時寄宿舎に住んで近隣の中学校に通っており、その後浙江省の電機工場に１年ほど勤めた後、延安に戻り現在は延安市内に一人で住み、仕事をしている。今回の結婚式の主役である長男の郝永強さんは、2005年当時には20歳で、延安近郊で建築工の見習いをしていたが、2009年に著者らが調査に訪れた時には村に戻っており、父親と同居していた。著者らは最初、当時の永強さんの村への滞在は一時的なものかと思っていたのだが、聞けば近々結婚して村に住み、父の跡を継いで農業を営むつもりなのだという。調査の合間に話を聞くうち、2010年１月17日に北宋塔村で予定されている結婚式に合わせて著者らも村を再訪し、その一部始終を記録にとどめておこうではないか、ということになった。著者らには前章で述べた目論見もあったが、映像記録なども含め、日頃お世話になっている一家に喜んでもらうことが出来ればという考えもあった。

３　婚前調査と縁組み

中国の農村社会において結婚を前提とする交際をすすめる場合、縁談の相談（说媒）、縁談の申し込み（提亲）、縁談に応じること（议亲）、結納式（订婚）のプロセスを経ることになる。これらは中国の多くの地域に共通する手順である。以下、郝さんを含む村人から聞き取った対象地域の一般的な慣習をまじえながら、郝家のケースに基づいて順に記述する。

３－１．縁談の相談（说媒）

縁談をすすめるには媒酌人が不可欠である。通常は、男性の側から媒酌人に依頼して結婚相手を探してもらうのが一般的であるが、年齢やその他の家庭事情などにより、女性の方から積極的に結婚相手を探してもらいたいというケースも少なくない。中国では古くから“地下无水不成河，天下无媒不成亲”という言葉がある。媒酌人がいないと、女性の方は絶対に見合いしないことである。都市部ではこのような慣習は徐々に守られなくなっているが、農村地域では今回の事例のように男性側から申し込むのが現在でも一般的であるという。

媒酌人の適性としては、社会的信用があり人脈も広いことが大切である。依頼者の家庭をよく知っている知人を媒酌人として正式に依頼し、事前に結婚の条件などを媒酌人に伝える。条件としては、本人の希望や仕事の事情、将来的に親を扶養するかどうか、結婚後は女性も仕事を続けるかどうかなどについてきちんと伝えることが重要である。媒酌人を引き受けてもらえたら、申し込む本人が直接訪問し、改めて媒酌人に対して挨拶をする。媒酌人はやはり自ら良く知っている家庭の相手の中から適切な相手を推薦することになるが、結婚する本人たちの性格を把握した上で、双方の家庭事情をあらためて調べる必要がある。調査項目として、人柄の良さや家の素性のほか、それぞれの家族内に「わきが臭」があるかどうか（わきが臭が遺伝によって子に伝えられるという考え方によるもの）なども必要とされる。万一当事者がお互いに直接伝えにくいことがある場合は、媒酌人を通じてその気持ちを相手に伝えてもらう。

相性が合いそうな相手が見つかると、男女双方の生まれた年月日時を表す干支を組み合わせた八字である生辰八字（素性）を調べ、二人の運命を占う。中国では“男犯妻家三十六，女犯婆家一世穷”という、「干支などであわない場合があれば、縁を結ばない」ということわざがある。また、“姨姨作婆，刀尖相磨；姑姑作婆，一世不和”と古くから人々に言い習わされたことばがあり、近親結婚が厳禁であり、５代以内の家族内部の結婚は絶対に認められない。さらに10世代以内の同じ姓の結婚も認められないとされている。

３－２．縁談の申し込み（提亲）

以上の条件を全て満たすと、正式な縁談の依頼にすすむ。まず男女双方から、普段の自分の表情がでている温かみのあるスナップ写真を数枚用意し、写真をみて判断した後に交際の意思を相手に伝える。双方とも交際の意思がある場合は、媒酌人に伝えて男性方が見合いをセッティングし、交際が開始される。対象地域である中国・陝北地方の慣習では、見合いに行く際に、数十元の礼金（現地の方言で“启发”）を男性側が持っていく必要がある。女性側に交際の意思がある場合はそのお金を受け取り、逆にその意思がなければ受け取らないという。

以上は一般的な対象地域の慣習であるが、永強さんの見合いの時は正式な見合いのプロセスを経ることなく、略

式で交際が始まった。まず、永強さんと同じく北宋塔村に住んでいる友人の奥さんの故郷であり、20kmほど離れた大庄河村の劉佳さんを紹介してもらった。同村の友人や後の媒酌人を通して家庭事情と本人の条件を相手に伝えてもらった後に、ちょうど劉佳さんが北宋塔村に遊びに行った時に二人が直接面会できたそうである。双方とも積極的な交際の意思があったため、出会った後に媒酌人を正式に依頼した。劉佳さんの話では、友人（後の媒酌人）から永強さんは大変良い男性と聞いていたので、興味を持ちドキドキしながら直接に会うことになったとのことである。

ある村人は、本来なら慣習通りに媒酌人を同行させて女性の家を訪ねる必要があると述べた。それは、写真だけでは判断できないこともあり、直接訪問して女性の方の容貌が端正かどうかを確認することが重要だからということである。逆に女性方の家族も男性の容貌を確認し、さらに話の内容と言葉遣いで男性の性格や社交能力を確かめる必要がある。この地方の慣習として、女性の方に交際の意思がある場合は、見合いに訪れた男性に麺類を食べさせる。これには、麺類がまっすぐで滑らかな形をしていることから、これから順調に事をすすめるようにという願いがあるのだという。逆の場合は、ゆでたまごを食べさせる（現地では“滚蛋”と呼ばれる）。その意は「どけ、拒否する」ということである。たまごが円形をしていることから、ボールのように蹴るイメージから来たものらしい。ただし、近年の見合いでは基本的に麺類を食べさせると伺った。永強さん本人は、ちゃんと麺類をご馳走になったとのことであった。

３－３．縁談の受け入れ（议亲）

陝北地方の慣習として、縁談の申し込み（提亲）の後に、まず女性方の家庭内部で話し合いをして、娘を嫁がせるかどうかを決める。積極的な結論が出た場合、媒酌人の紹介によって男性の父親が女性方の家族を訪問し、親同士が挨拶することになる。この訪問は“喝酒・商话”と呼ばれる。この訪問時には、花嫁となる娘の欲しいものなどを聞いておく。訪問時に女性方の出す条件を聞いて、家に戻って家族で相談してから、２週間ほど後に再び訪問して会食し、相談の結果を伝える。この式は現地では“言彩礼”と呼ばれている。

永強さんの場合は、完全に略式で行われ、“喝酒・商话”と“言彩礼”をまとめて一回で済ませた。その理由を確認したところ、すでに媒酌人を通して事前に聞いて諸条件を把握していたのでそれで十分とのことであった。会食の際には、男性方が必要な酒と食べ物を用意し、男性方の父親、同村の友人、媒酌人が女性の家を訪ねた。郝さんは、一回で1,000元以上かかるため、なるべく節約できるように略式で済ませたかったという本音を語ってくれた。郝さんが当日に持って行ったものは表１の通りである。

表１　会食（喝酒）のために用意した品の細目

品目	数量	金額（単位：元）
白酒	２ケース	480
ビール	２ケース	64
小麦粉	２袋（25kg/袋）	130
タバコ	２カートン	260
おかず	６品	100

出所：聞き取りにより筆者作成

会食の際に話し合った内容としては、まず結納金（彩礼）として11,000元が必要と劉家の両親から希望があった。結納金は全て花嫁の両親が受け取る。また、劉家の家族全員に結婚式用の衣装代を永強さんの父親が用意することとなった。図３の実線枠で囲まれているのが、劉家で衣装代が提供された人々である。図３からわかるように、兄の嫁（佳さんの義姉）も身内の方として衣装を提供される一方、結婚して他家に嫁いだ実姉は衣装は提供されない。この事例では総じて、花嫁以外に10人分の衣装を花婿の父親が用意する必要があった。両家で相談した結果、衣装代として１人あたり300元、合計3,000元で合意した。後述するように、花嫁の衣装も婿方の家で用意する必要がある。

また、花嫁の佳さんから希望するものを尋ね、金のイヤリング、ネックレス、リング、ブレスレットを用意することになり、これらの費用として12,000元見積もることになった。さらに、佳さんから結婚後、延安市に小売店を作って起業したいという希望があった。現代の経済発展と都市化の拡大により、村の若者も都市部に移住する傾向を反映して、このような要望も珍しくないらしい。この資本金として、郝家で30,000元を提供することになった。

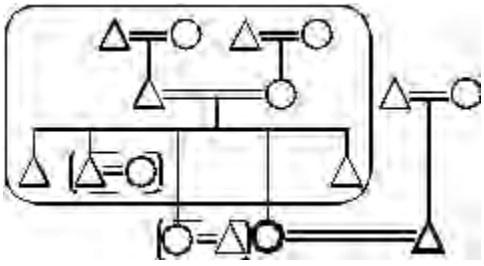

図３　花婿の父親が結婚式用の衣装代を渡す花嫁方のメンバー（実線枠内）

注：△は男性、○は女性を示す。太線で示した男女が劉佳さんと郝永強さん。他に線で囲まれた二組の夫婦は既婚を示す。
出所：聞き取りにより筆者作成

一方、花嫁の両親に対して、20数年間娘を育て上げた感謝の気持ちを表す慣習として、婿方から布団セッ

トを渡す必要がある。さらに結婚しても縁が切れないように、現地では“裏情布”というものを花嫁の母親に渡す必要がある。これらについては両家の相談により、全部お金に換算して代金を渡すことにした。“裏情布”は、かつては感謝を込めた縁起物として布が渡されていた慣習だそうだが、現在ではこのようにほとんどのケースが現金で代用される。布団セット500元と“裏情布”代金880元で合意した。

以上の項目を全部まとめてみると、縁談成立までにおよそ60,000元がかかることがわかった。郝さんは息子の将来が幸せになれるように願い、花嫁側の条件をすべて受諾した。慣習として、この「议亲」の段階で基本的に結納品（彩礼）の一部を渡さなければならない。永強さんの場合は事前に媒酌人から希望した金額を聞いていたため、当日に結納金として11,000元を渡した。

３－４．結納式（订婚）

続いて、正式な縁談の取り決め（订婚）が行われる。具体的には、「议亲」の際に約束した条件を実現させて、婿方から嫁方へ結納品を送るもので、その儀式あるいは結納品は“彩礼”と呼ばれる。永強さんの場合は「议亲」の際に結納金はすでに渡したため、この時は他の衣装代や、アクセサリー代と裏情布代金などのお金を渡した。本来なら、小売店出店のための起業基本金も当日に渡さないといけないが、郝家がすぐ用意できなかったので、媒酌人にお願いして嫁方の両親と相談し、結婚式当日に渡してもらえるのであれば結構だということになった。このように、直接話しにくいことは媒酌人を介して伝える。前回（议亲）に渡した結納金と今回支払った他の必要な金額に対して、嫁方は納得した。

一方、嫁方から返礼する形式で、電気製品や布団セットなどを新婚夫婦に贈る。永強さんたちの場合は洗濯機、電気ポット、布団セットなどを受け取った。

この結納式において嫁方が全て納得して受け入れると、その場で酒を飲みながら結婚式の日取りを相談する。日本と同様、結婚式は縁起が良い日に行われなければならない。そのため、事前に八卦を見てもらう。一般的には、旧暦の３，６，９が付いている日が良いと考えられる。永強さんの場合は事前に八卦を占ってもらった結果、2010年１月17日（旧暦12月３日）に決めた。

４　式の準備から結婚式まで

４－１．結婚する前の準備作業

４－１－１．新婚夫婦用の布団づくり

この地域の慣習として、新婚夫婦にはシルクの綿入れ布団を４セット用意する必要がある。この作業は花嫁の母親が、裁縫が上手な村人や親戚などの協力を得ながら、自ら作成する。

４－１－２．婚礼とお色直しの衣装準備

婚礼とお色直しの衣装を準備する。陝北地方の冬はかなり寒い日が続くため、こちらも綿入れの洋服を準備しないといけない。村人への聞き取りによると、北宋塔村では裁縫が上手な人が少なくなってしまったため、町で既製品を購入することが多くなった。永強さんの場合も延安で市販のものを購入した。近年の新しいやり方として、披露宴の途中、花嫁が伝統的な中国式の衣装からウェディングドレスに着替える「お色直し」をすることになり、このための衣装も準備された。

４－１－３．新居の用意と家具・電気製品の購入計画

婿方居住の慣習に従い、新婚夫婦の新居は婿方で用意する必要がある。主な収入を農業に頼る永強さんの父の収入は多いとはいえず、現在住んでいる北宋塔村の窰洞式住居も親から引き継いだものを2000年に改築した。家族で相談した結果、今まで永強さんの両親が愛用してきた南向きの家を再び改築し、新居として提供することに決まった。両親自身は、元々倉庫として使ってきた本宅の隣にある西向きの小さな家屋に引っ越した（写真３・４）。

新居のほうは家族の協力でうまく調整できたが、同時に新居用の家具、家電、生活用品などについても調達する必要がある。家具については、市販のものを購入し、ソファ（1,200元）、タンス（1,800元）なども新調した。電気製品は、郝さんの二女が延安市内にある大きい電気屋で働いているため、従業員割引で安く性能がよい電気製品を調達してもらった。冷蔵庫、ホームシアターなどで合計12,000元がかかった（写真５）。

４－１－４．新婚記念写真集の依頼

今日の中国では広く行われているが、花嫁と花婿の思い出と記念として、自らの写真をアルバムとして記録しておくカップルが多い。永強さん夫妻の場合は、延安市内の写真館に依頼して写真集を作成した（写真６）。費用として、結婚式当日の花嫁の化粧などを含め合計3,000元で合意を取り付けた。

４－１－５．当日のスタッフへの依頼

結婚式の日取りが決まると、村人たちの家を訪ね歩き、式当日の様々な仕事を手伝ってもらうよう合意を取り付ける。同時に、永強さんと両親の親戚や知人・友人

など、日々お世話になっている人をリストアップし、招待状の作成・発送を行う。

式用食器セットの準備については、従来なら村人を一軒一軒訪ねまわり、式に必要な鍋、食器、テーブル、椅子などを借りる約束を取り付ける必要がある。近年では、北宋塔村の属する高橋郷に儀礼用の食器セットをレンタルする業者があり、郝さんの場合も１日60元で借用することになった。さらに、村で式を行う場合は都市部と違って宿泊施設がないため、親しい村人に頼んで当日に何名まで宿泊可能かを確認し、協力を取り付ける。足りない布団セットやシーツなどは事前に準備しないといけない。この仕事は主に母親の仕事である。

上記の準備をしつつ、式のおよそ１ヶ月前には、当日のスタッフを家に招いて式の進行・料理・演出などの詳細を相談する。この打ち合わせ会は“约客”と呼ばれ、酒を振る舞いながらの集まりとなる。この目的と主な打ち合わせ内容は、（１）年長者や媒酌人の助言により、花嫁の迎え役（後述）のメンバーを決めること、（２）当日の具体的なスケジュールを決めること、（３）世話役の方々へのお礼とお願いの気持ちを事前に表すこと、（４）料理長の腕を確かめること、などである。これらの準備がすべて万端であれば、式の１週間ほど前にはいよいよ結婚式の直前準備に入ることになる。

４－２．結婚式の直前準備

４－２－１．かまどと作業場の設置

村では屋内で披露宴をすることは不可能なので、調理・披露宴とも屋外で行う。そのため、事前にレンガ造りのかまどと、土を掘り込んで作る削りかまどを２種類しつらえる。かまどの設置場所には雨よけのシートをかけて当日の調理場となる（写真７・８）。

４－２－２．マントウ（饅头）の準備

中国北部農村の主食であるマントウ（蒸しパン）は、黄土高原地域においては特に結婚に際して花嫁の母親がその作り方を娘に習得させる慣習がある。これが結婚後、自ら炊事ができることの証となる。一方花婿方の母親は、宴会用のマントウを作って来賓に自分の器用さをアピールする。

このマントウは、祝賀の意を表すために魚やツバメなどの形にして食紅で工夫して飾り、接客用に饗する。これには姑の器用なところを来客に見せる意図もある。ただしこの結婚式の場合は、全て村の近くの市場から購入した。残念ながら食紅での飾りはなかった（写真９）。

４－２－３．食材の調達と下ごしらえ

４－２－３－１．材料の準備

事前に料理長と相談して、来客の人数に応じて酒・タバコや料理の材料を準備しておく必要がある。郝さんの場合は、300人を招待する予定であった。この時に準備された材料を表２にまとめた。

表２　準備された飲食材料のリスト

品名	数量	金額（単位：元）
タバコ	52カートン	4,000
お酒	30ケース	3,120
ソフトドリンク	12ケース	672
豚肉	205kg	2,400
マトン	75kg	600
チキン	35kg	630
さかな	35尾	未確認
野菜＆その他	若干	未確認

出所：北宋塔村における聞き取りにより筆者作成

表２に示された材料の調達について、郝さんから聞き取ったことをいくつかあげておくと、（１）タバコは地元で最も人気がある「延安」というブランドのタバコを、「极品延安」10カートン（単価120元／カートン）と、「延安」42カートン（単価56元／カートン）分を購入、（２）お酒については、“辣酒”と呼ばれる蒸留酒とビール二種類を用意し、“辣酒”については全国的にも知られている陝西省の地酒ブランド「精品西凤」を15ケースで90本（単価180元／ケース）、ビールは「青岛干啤」を15ケースで180本（単価28元／ケース）分を購入、（３）ソフトドリンクはペプシとコカ・コーラ二種類を計12ケースで144本分（単価56元／ケース）を調達、（４）豚肉は、自宅で飼っていた1頭を屠った（肉105kgがとれた）ほか、市場から100kg分（単価24元/kg）を購入、（５）自宅で飼っていたオスのヤギ１頭を殺し（肉35kg）、市場から2頭のヒツジ（計40kg）分（単価15元/kg）を用意、（６）鶏肉は主に煮込み料理に使うため、35kg分（単価18元/kg）の骨付き腿肉を用意、（７）自宅のビニールハウスで野菜を栽培しているが、収穫期はまだ先であったため、全ての野菜を市場で購入し、他に卵、きくらげ、醤油、塩、八角等の調味料を購入した、とのことであった（写真10～13）。

材料を調達すると、調理の下ごしらえに入る。魚は新鮮なものを入手することが難しいため、冷凍のコイ・ナマズ類などの淡水魚を購入し、解凍して内臓・エラなどを除いておく。式の当日からでは調理が間に合わないため、あらかじめ野菜は切り、豚肉や鶏肉を調味・加熱し

ておく必要がある（写真14･15）。

今回は、比較的良い天候が続いたが、冬なので気温は昼でも５度以下の低温で室外の作業は辛く、手伝いのスタッフたちも寒い寒いと言い続けながらの作業が続いた。傍らで調査を続ける筆者にも、ヒツジのモツ煮込みスープなどの温かいごちそうを用意していただいた（写真16）。一方、連日の疲れで郝さんは風邪で体調を崩してしまい、気温５度の野外で点滴をしながらスタッフたちを指示することになった（写真17）。

４－２－３－２．豆腐作り

今回は自家製の豆で豆腐を準備した。主な工程を記す。前日から豆を水につけ、豆と漬汁を一緒にミキサーにかけてクリーム状にひき、大鍋に水を入れて沸騰させ、そこにクリーム状にした豆を入れてかき混ぜながら強火で加熱する。泡をこまめにすくい取り、泡があふれる直前に火を止める。泡が落ち着いてから弱火にし、焦げつかないように木べらでかきまぜながら数分間煮る。まだ冷めないうちにボウルにかたく絞ったさらしの布に入れ、布の縁を集めるようにして包み、ねじって口をしっかり閉じ、ギュッと絞り、濾しとる（写真18）。豆乳を再び75度前後に温め、にがりを木べらに伝わせ、円を描くように少しずつ全体に回し入れる。最後にそっと混ぜ、ふたをして固めると出来上がる。

４－２－３－３．モチ作り

陝北地方においては慶事の際、地元の名産物でもあるモチ性のキビ（軟米）を用いた黄色いモチが不可欠である。モチ作りの工程についても、以下に簡略に示す。まず、ごみをとり、水でアワがやわらかくなるまで水につける。できたものをロバを使って石臼（碾子）で粉をつくる。できたキビ粉をふるいにかけた後に蒸し、油をくわえて練る。これを当日にスライスし、サラダ油であげる（写真19･20）。

以上の準備の後、いよいよ式の当日に向かう準備に入ることになる。こちらの世話役は主に女性たちに任せられる。新居の準備、片付け、庭の掃除などのことを全部きれいにしないといけない。男性たちの方は、爆竹や迎え用の自動車に必要な飾り物を準備する。

４－２－４．花嫁のメークアップ

村の女性たちは普段ほとんど化粧をしないため、前もって業者に依頼し、当日の朝に家に来てもらい、化粧をしてもらうケースが多いようである。永強さんたちの場合には前述の写真集の作成に当日の化粧代も含まれていたため、延安でメークアップすることになった。しかし、当日の朝は６時半からの予約だったため、当日の早朝村からのアクセスが難しく、どうしたらよいかを家族みんなで議論していたが、著者の提案で前日（１月16日）に延安のホテルを一泊招待すると約束した。そして16日の夕方頃、著者と新郎新婦は延安に向かい、夜にはいよいよ新婚生活をはじまる二人を誘ってホテルのレストランでごちそうをした。その際には、二人の馴れ初めや将来の夢などについて話を聞くことができた（写真21）。

４－３．結婚式当日

４－３－１．車の手配

結婚式当日の朝７時半頃、事前に車を依頼した郝さんの弟の友人たちが、約束通りに車に乗って村に来てくれた。郝さんの弟の人脈により、ランドローバーやアウディなどの高級車８台を用意してくれた。車の到着後ただちに、若い人たちが車の飾り物を準備した（写真22）。

４－３－２．楽隊の準備

陝北地方においては一般に、結婚式の際にチャルメラ（唢呐）、太鼓、銅鑼（锣）など一式の楽隊と民謡歌手に依頼し、披露宴の盛り上げをする。花嫁を実家の村に迎えに出発する時間になると、まずチャルメラを発し（长号）、爆竹鳴り響かせながら、迎えに行くチームが出発する。

今回の場合、迎えに行く行進メンバーはお叔父さん夫妻とお姉さん夫妻で、そして手伝い役（道案内や爆竹担当など）として、従兄弟たちの数人やカメラマンが同行した。こうしてまず、花嫁の実家である大庄河村で大変盛大な披露宴が行われた（写真23）。

４－３－３．花嫁の家でのイベント

陝北地方の慣習では、まず花嫁の家で、嫁方の親戚・友人などを接待し、披露宴を行う。この時に、事前に合意した結納金などで未払いの分があれば納めないといけない。今回においては、両家で約束した起業のための資金30,000元などを渡す場面があった。さらに、当日には嫁方・婿方双方の実家から新郎新婦にお金を渡す慣習があり、このお金は“压箱钱”と呼ばれる。聞き取りによると、通常は压箱钱というのはまず花嫁の家が花婿に贈り、花婿方はそれの倍額を返礼として花嫁に渡すマナーがある。永強さんの場合は、事前に打ち合わせしており、倍額ではなく嫁方と同額の縁起の良い数字である1,888元を花嫁に渡した（写真24）。

花嫁の実家の庭で行われた宴席は参加者も多く、楽隊の演奏が響く賑やかなものであった。この地域の農村部

の慣習で、来客には酒とともにトマトソースなどをかけたうどん（饸饹）が振る舞われる。新婚夫婦が来客に酒を注ぎながら、挨拶をする（写真25･26）。宴会では、ゲームで新婚夫婦にキスをさせたりする余興もあった（写真27）。一方、迎え役は別の場所を提供されて接待を受ける。同じ年代の親戚についてもらい、親戚同士で酒を飲みながら談笑する（写真28）。

宴会が終わると、いよいよ新婚夫婦は婿方の家に戻る時間となる。その前には、嫁方の家族全員で記念写真を撮る。そして媒酌人には感謝の意をこめて慰労品の贈呈式（“谢媒人”と呼ばれる）を行う。贈り物のやりとりの場合では、媒酌人と嫁方の父がお互いに何度も固辞し、勧める側とけんかかと思われるほどの押し回答をする。現地の習慣では、タバコ１カートン、酒２本、革靴１足、現金400元程度を用意するとのことであるが、上記のやりとりの結果、最終的に革靴とタバコ、酒だけを受け取った。このような媒酌人の振る舞いは、その任務が商売ではないことを示すために現金は絶対に受け取らないというマナーにもとづくものである。また革靴が渡されるのは、媒酌人が両家の縁結びのために奔走したことに対する感謝の意を表す。このやりとりの最中、著者は花嫁の父親の諒解を得て当日のお祝儀の収入について聞き取りを行ったところ、合計13,000元であった。

出発前に、花嫁は中国式のドレスからウェディングドレスに着替え、マントウに囲まれて座る“围儿女馍馍”と呼ばれる儀礼を行う（写真30）。これは、早く子供が生まれるようにという意味を持っている。村を出る時には、花嫁の出発を惜しみ、儀礼的に花嫁の従兄弟たちが花嫁を引き留める（写真31）。

４－３－４．新居に戻った後のイベント

婿方の村に戻った時には、新郎の親戚や友人たちが出迎えをかね、途中でゲームなどをして新婚夫婦と遊ぶ。これは陝北地域の慣習で、これからの生活上の困難に対して夫婦への激励を示すとのことである。村に入ると集まった村人や来客が出迎える（写真32）。

新居に戻った新婚夫婦には、まず現地の慣習である髪の毛を結ぶ儀礼（“上头”と呼ばれている）を行う（写真33）。これには、これからの生活を夫婦ともに頑張ってゆくとの願いがある。この式を行う最中には、他の人を部屋の中に入れてはいけない。特に若い女の子は絶対に入ってはいけない。その理由は、もし式の途中に女性が中に入ってしまうと、夫婦に女の子が生まれてくるという信仰があるからであり、男児偏重の伝統が今も残っていることを示すものである。

その間、庭では、来客にトマトソースのうどんを振る舞われる。楽隊の演奏は始終鳴り響いていた（写真34）。陝北地域では、結婚式当日に嫁方の家で祝宴を開くため、婿方では披露宴を行わず、翌日に行う。そのため、うどんを食べると過半数の来客は帰り、後は二次会的な新郎の友人たちの集まりや、送り役の親戚の接待などだけである。残った身内の人々は翌日のごちそうの準備をする。一方家の中では、女性たちが集まってきており、花嫁が自分で作った靴や、刺繍入りの靴の中敷き（鞋垫）を見せてくれた。裁縫の腕前を披露するため、花嫁は自ら丹精込めて作った靴と中敷きを見せた（写真35･36）。

夜になると、嫁方の村から来た送り役の親戚たちへの接待が始まる。最初に楽隊がチャルメラを鳴らし（长号）、花婿は送り役の親戚たちに酒を注ぎ、お祝いの言葉とお祝いを受ける“送夜酒”と呼ばれる祝宴を行う（写真37･38）。

送夜酒が終わると、“闹洞房”と呼ばれる友人たちとの宴会がはじまる。かつては結婚式の当日まで、花婿の友人たちと花嫁はもちろん、新郎新婦さえも互いに会ったことがないことが珍しくなかった。そのため、花婿の友達がその仲介役として、いろいろなゲーム等を出して互いに馴染みになるために行われるというのが、この慣習の意味だった。友人は新婚夫婦の最も大事な客であるため、大切にしないといけない（写真39）。一方この席では、友人たちは新郎新婦に祝い金を渡す。口で飴をとり争ってもらったりなどのゲームで楽しんだ。

この宴席が終わると友人たちは帰り、花婿の母親が花嫁に水餃子を作って食べさせる。これは、早く孫ができるように祈ってとの意味を持ち、“儿女扁食”と呼ばれる。そして、新婚夫婦の就寝後、花婿の母親が窓から部屋の中にマントウを投げる。７個を投げ、そのうち４個以上が表向きに落ちると、男の子が生まれると信じられている。この時は５個が表になった。男児を願う縁起として思い通りに表が出るように繰り返すものと推測され、男の子を願う儀礼であると解釈できる。

以上のイベントが全て無事に終わり、降り注ぐばかりの美しい星に包まれ、静かな夜に迎えた。

４－３－５．婿方での披露宴

結婚式の翌日は、花婿の家で親戚や友人たちをもてなすことになる。普段の村には商店などはないが、朝の９時頃から占いや移動式の小売屋が次々と村に訪ねに来る（写真40･41）。

午前中の新婚夫婦の役目としては、花婿の紹介で身内の親戚たちを花嫁に紹介する。紹介された親戚は花嫁にお祝いを贈り、花嫁は返礼として普段使えるような小品を贈る。この時は、返礼として肌着を贈った。贈り物の

準備は花婿の母親がしてくれたという（写真42）。この行為は、“认亲戚”と呼ばれている。その後、親族全員を紹介してから皆で記念写真を撮る（写真43）。

こうするうちに来客が次々と到着すると、まずは定番であるトマトソースのうどんを振る舞い、その後に本格的な宴会がはじまる。前日と同様に、楽隊の演奏が高いボリュームで宴会の始終鳴き響く。来客はまず祝儀記載を行い、宴会に入る。披露宴は郝さん宅の庭で行われたが、200人を超える宴席としてはスペースが限られており、一同で宴を行うことは不可能であるため、４回の交代制で行った。宴会の用意ができるまで来客たちは庭の端に立ちながら待つ（写真44･45）。この宴会には、地元でかなり有名な歌手を呼んだ。宴席が空くまで待っている来客たちは歌を楽しんでいるようであった。歌手の歌は一曲ごとの注文式で、１曲10元で来客の注文に応じて歌を披露し、この日は水も飲まずにおよそ４時間で100曲以上を歌った（写真46）。

以上で結婚式が全て終了し、合わせて211戸（世帯）が宴会に参加したことがわかった。祝儀は合計で22,440元集まった。最後には新郎新婦が、今回の結婚式で最も走り回った両親や媒酌人などにお礼をした。父親の方からも媒酌人に対して、前日のように喧嘩のような慰労品贈呈式を行った。遠く日本から結婚式に参加した著者にも感謝の意をこめて慰労品の贈呈をして下さった（写真47）。

全てが無事に終わったが、両親たちは今回の結婚式のために重ねた借金の返済という課題が残る。郝さんに確認したところ、全体の費用は約11万元であり、約６万元の借金が残っている。聞き取りによると、村では郝さんの事例に限らず、多くの家族が結婚に際して莫大な借金をしないといけない現状があるとのことである。この借金をどうやって返済するのかは気になるところである。

５　北宋塔村の結婚にみる伝統と変容

以上に、郝家・劉家の事例に基づいて、縁談から結婚式までのプロセスを具体的に記述した。「伝統と変容」を正確に切り分け考察するためには、そもそも伝統的な結婚式とは何を指すのか、ということが問われなければならないと同時に、その諸要素を正確に時系列におくことが要求されるであろうが、現段階で著者らはその十分な資料を持たない。ここでは仮に、調査における聞き取りから得られた「村人たちが伝統と考えるもの」および「昨今の変容と考えるもの」をその代替材料として、若干の考察をしておきたい。

まず疑問の余地のない近年の「変容」として、結婚費用の増大があげられるだろう。今から二十数年前、1980年代に永強さんの父母が結婚した時、結納金はわずか480元だった[ii]。改革開放路線が始まって間もないこの頃は、１万元以上の財産を持つ世帯が“万元戸”と呼ばれる富裕世帯とされ注目された時代であった。一方、今回の永強さん夫妻の結婚における結納金は、起業資本金として提供された３万元を含めると合計６万元にのぼり、実に125倍に跳ね上がったことになる。結納金のみならず、新居の家具調達などに１万２千元をかけたほか、写真集の作成にかかる３千元や、その他縁談に費やす費用など、そのほとんどが花婿の両親の出費となる。郝さんの場合も、総額およそ11万元をかけ、６万元の借金が残った。息子の結婚は、冠婚葬祭の中でも飛び抜けた出費を強いられるものであり、その状況は都市でも農村でも変わりないようだ。

村での聞き取りでは、息子の結婚に際して大半の世帯が借金をすることがわかった。親戚や銀行から借りるのは容易ではなく、多くの家では高利子で他人から借りるとのことであった。そして、この借金を返すために男性たちは都市へ出稼ぎに出ることになり、結果として村の高齢化に拍車がかかる。村長などの仕事もこなしながらビニルハウス農業に収入を頼ってきた郝玉宝さんも、2009年に村を訪れた際に、「農業はしんどい割に儲からない、自分も来年からは町に出て建築作業の仕事でもやるか」とつぶやいたのが印象深く記憶に残っている。冒頭に述べた深尾ら（2005）の「日本人による伝統的結婚式」の試みは、こうした跡継ぎ息子のための結婚式が借金を生み、出稼ぎと過疎化を促すという悪循環を絶つ願いも込められたものであり、これが北宋塔村に限った状況ではないということが窺える。

これに関連して、結婚式の儀式が豪華かつ派手になる傾向が進んでいることも明らかとなった。象徴的なものは、高級車を連ねて行進する花嫁を迎える儀礼であろう。玉宝さんの結婚も含め、車の入る道もない時代の伝統的な結婚式では、婿方の親族はロバに乗って花嫁を迎えに行き、婿方の村に入る際には花嫁を乗せた華やかな御輿を担いでいくのが大きなイベントだった。現在では前述の通り、高級車に飾りをつけての行進に変わった。楽隊も、電気のない以前にはチャルメラと太鼓だけで盛り上げるものだったと言われ、その技術は今とは比べものにならないほど卓越したものだったという。料理もかつては自前の家畜を屠って饗するのがメインであったということだが、現在では主なものは市場で購入するようになった。新しい生活の準備においても、家電製品などかつてはなかった調度品を、全て現金を介して用意する

ものになった。いずれもほんの20年前には全く見られなかったものであろう。

しかしながら、こうした貨幣経済の浸透を背景にした表面上の変容の一方で、伝統の持続とみることのできる要素も少なくない。その一つが、挙式に際しての村人の協力関係である。式の準備に際しては郝さんが一軒一軒隣家を訪ねて依頼をし、役割分担が決まる。特に料理の準備には、かまどの設置から買い出し、下ごしらえ、当日の調理や食器の用意と、多くの隣人の協力が不可欠となる。同様の村内における協力関係は、2009年に著者らが村に滞在していた時の「新生児の誕生後一ヶ月のお祝い」に際しても観察された。これらは互酬的に繰り返される村の人間関係として、現在まで持続しているものと考えられる。新生児の儀礼の際には、普段は過疎に見える村の様子が、続々と帰郷する若い世代の村出身者で埋まり一変する風景に、著者らは深く印象づけられた。北宋塔村の場合、延安市に比較的近いこともあると思われるが、都市部で働いていても村との関係は疎遠にならずに持続していることも窺うことができた。

そして、結婚の基層構造としての、嫁取り婚や夫方居住も、少なくとも農村部では変わらず持続している。関連して、2005年の世帯調査では、村の23世帯中村内婚は２例のみで、村内婚率は１割に満たず、多くの世帯は数キロ圏内の近隣の村から嫁を迎えていることがわかったが、この点もあまり変化はないようである[iii]。結婚に際しての親の決定権については、永強さんのケースで伴侶の選択に本人の意思が働いていることからも見えるように、「結婚式当日までお互いに会うこともない」ような、完全に親が決める結婚はもうほとんど見られないのかもしれない。ただ、縁談成立までのプロセスや結婚費用の工面にみるように、依然として結婚が「親どうしの儀礼」である側面は変わらないといえるだろう。

結婚をめぐる親族関係に関連して、「男児偏重」の考え方も色濃く残されていることも、今回の観察から明らかである。花嫁をマントウで囲む“围儿女馍馍”、夫婦が髪の毛で結び合う“上头”、花婿の母親が花嫁をもてなす“儿女扁食”の後のマントウを投げる占い、これらは全て男児の誕生を望む儀式を含んでいる。男児の誕生を望む傾向は、父系・夫方居住の親族システムとともに、共産党による土地改革などを経ても農村部においては持続してきた。この傾向は農村部の伝統的な社会関係が続く限り、今後もしばらくは続くのではないかと思われるが、将来予想される成人男女人口のアンバランスが進行した後にどうなるだろうか。また、都市化がますます進展していくにつれ、こうした傾向も変容していくことになるのだろうか。現段階では、予想はしがたい。

以上のように、中国の伝統である父系の結婚システムが貨幣経済の急激な波をかぶる形で、豪華かつ派手になる結婚式、そして結婚費用の増大という大きな変容を受けつつも、表面上の変化の底流には変わらぬ社会関係と伝統の持続も見られた。今後は、若い世代の都市・農村間の人口流動や関連する経済生活の変化をさらに考察の材料に加えながら、中国農村社会の持続と変容の様相について検討していきたい。

＜謝辞＞

現地では、郝さん一家の協力はもちろん、村の方々に温かく接していただき、実りの多い調査を行うことができた。北宋塔村の皆さんに深く感謝の意を申し上げる。また、現地のカメラマンである王安塞さんの協力を得ており、王さんからは陝北地方の結婚式の慣習についても多くの貴重な情報を提供いただいた。同様に感謝の意を申しあげたい。

本稿のもとになった調査は日本学術振興会拠点大学交流事業「中国内陸部の砂漠化防止及び開発利用に関する研究」と、鳥取大学乾燥地研究センター共同利用研究「リモートセンシング・GISと現地調査による黄土高原地域の土地利用変化の研究」（平成17・18年度）・「退耕還林政策による黄土高原の土地被覆変化とその社会経済要因に関する研究」（平成19年度）（いずれも代表者・佐藤廉也、特別研究B-1）、昭和シェル石油環境研究助成「『退耕還林』政策前後の土地利用変化の研究」（研究代表者・縄田浩志、課題番号2006-B101）、科研費基盤研究S「牧畜文化解析によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明とその現代的動態の研究」（平成21，22年度）（研究代表者・嶋田義仁、課題番号21221011）、鳥取大学乾燥地研究センター共同利用研究「黄土高原の社会開発に関する研究」（平成22年度）（研究代表者・縄田浩志、課題番号30397848）、および中国科学技術部によるプロジェクト研究（課題番号2006BAD09B03）、中国科学院によるプロジェクト研究（課題番号KZCX2-XB2-05）からの援助を得て実施された。上記すべての援助に対して謝意を表する。

＜引用文献＞

佐藤廉也ほか 2008. 中国黄土高原における伝統的土地利用と退耕還林. 比較社会文化 14：7-21.

末次玲子 2000. 女性のくらしと両性関係. 三谷孝ほか『村から中国を読む　華北農村五十年史』青木書店：237-269.

関良基ほか 2009.『中国の森林再生』御茶の水書房.
中生勝美 2000. 華北農村の社会関係. 三谷孝ほか『村から中国を読む　華北農村五十年史』青木書店：209-236.
深尾葉子ほか 2005. 黄土高原、日本人結婚式顛末記. 季刊民族学 29（3）：50-57.

注

[i] 当時の国民党政府は民法の施行によって、財産相続における男女平等とするなど、伝統的な父権的家族の理念の変革を試みた。結婚に際しては当人の意思を尊重し、刑法では妾を違法とするなどの改革も行われたという（末次 2000：241）。

[ii] 郝さんは、それでも当時の結納金の金額としては高い方だったと強調した。

[iii] 中生（2000：230）によれば、村内婚率が低い理由は婚家と嫁の実家との間には微妙な忌避関係があるためだという。なお中生は、中国北部農村の調査に基づいて、半世紀前に比べ村内婚率が上昇していると報告し、これを婚姻習慣の変化によるものと推論している。

図１　陝西省の略図と調査村の位置（等値線は年降水量を示す）

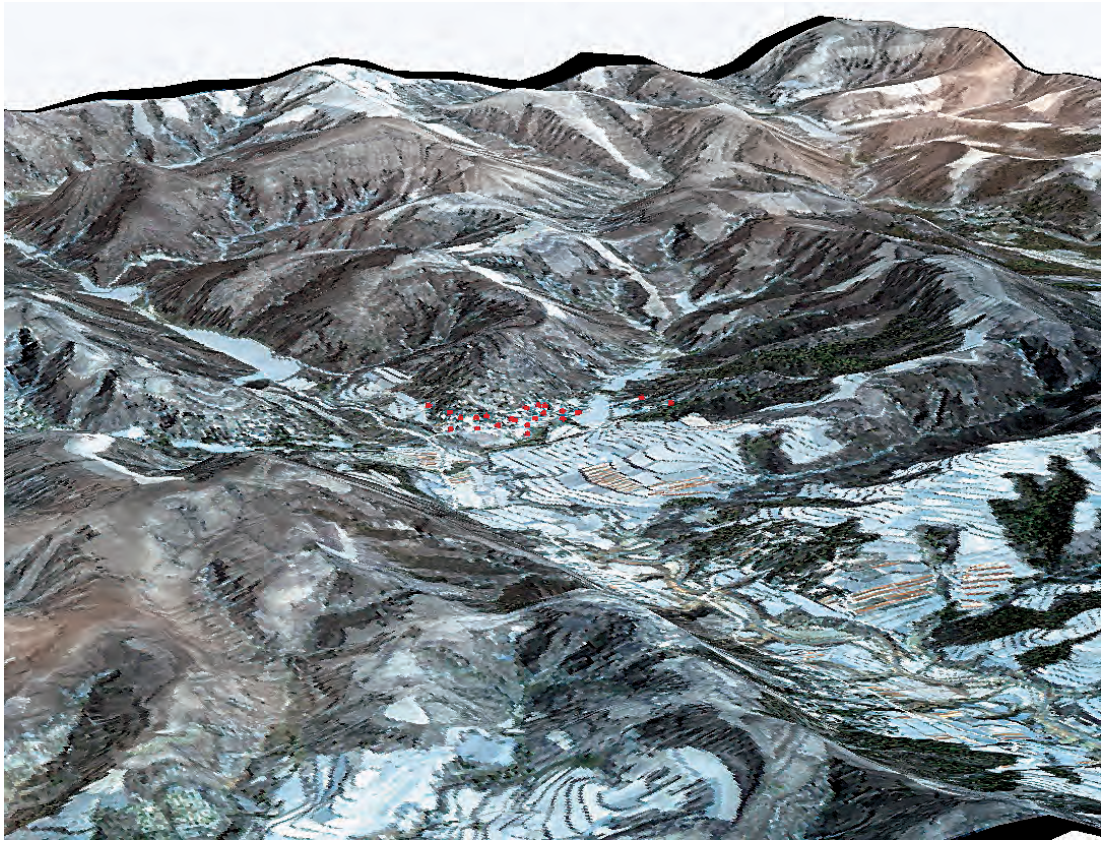

図２　北宋塔村の南方からの鳥瞰図（赤いドットは住居の分布を示す）
出所：QuickBird衛星画像をもとに作成

写真１　斜面に形成された北宋塔村の窰洞式住居群

写真２　退耕還林に伴い造成された大規模な段畑

写真３　永強さん夫婦の新居となった郝家の窰洞

写真４　両親の隠居宅になった小さな家屋

写真５　新たに購入した電気製品

写真６　アルバムにおさめられた記念写真

写真７　設置されたレンガ造りのかまどと調理場

写真８　掘り込み式のかまどで押し出し式うどんを茹でる

写真９　掘り込み式のかまどでマントウを温め直す

写真１０　購入した酒類（左）とレンタル食器（右手前）

写真１１　屠られたヤギ

写真１２　下ごしらえを終えたナマズ類

写真１３　ヒツジ肉や魚の下ごしらえ

写真１４　事前に調理された鶏・豚肉

写真１５　事前に刻まれた野菜など

写真１６　筆者がごちそうになった「賄い食」ヒツジのモツ煮込みとマントウ

写真17　点滴を受けながら
指示を出す郝さん

写真18　豆乳を絞る

写真19　ロバに石臼（碾子）を引かせて製粉する

写真20　蒸し上がったキビモチ

写真21　ホテルのレストランにて、挙式を翌日に控えたラブラブの二人

写真22　花嫁を迎える車隊

写真23　花嫁の迎え役メンバーと花婿（中央）

写真24　起業のための資金を受け取り、確認する

写真25　楽隊の演奏

写真26　新郎新婦が来客に酒を注ぐ

写真27　宴席での余興

写真28　親戚どうしの歓談

写真29　媒酌人への慰労

写真30　マントウに囲まれて座る“围儿女馍馍”の儀礼

写真31　花嫁を引き留める儀礼

写真32　庭で新郎新婦を迎える来客

写真33　髪を結ぶ儀礼

写真34　宴席でうどんを食する来客

写真35　自作の靴を披露する花嫁

写真36　花嫁の作った刺繍入りの中敷き

写真37　チャルメラの演奏

写真38　送夜酒の場面

写真39　花嫁にタバコの火をもらう花婿の友人

写真40　道端で占いをする老人

写真41　村にやってきた小売商

写真42　婿方の親戚に小品を渡す认亲戚

写真43　婿方の親族と新郎新婦の記念撮影

写真44　宴席の様子

写真45　来客は庭の端で待ち、スタッフは次の客のために皿を洗う

写真46　地元の歌手

写真47　慰労を受ける著者（賈）

Marriage and wedding ceremony of a village in Loess Plateau, China: As a description of changing/persistent tradition

Ruichen JIA, Ren'ya SATO, Hiroshi NAWATA, Kohei MATSUNAGA
Guobin LIU, Wenhui ZHANG, Norikazu YAMANAKA

Abstract

In inland rural China, recent economic development and penetration of cash economy have rapidly been changing social and material life of villagers. Keeping such a situation in mind, this paper aims to examine how some of social traditions have been changed and how others persist, by giving a detailed description of a marriage and accompanied wedding ceremony observed in a village (Beisong-Ta) located in Loess Plateau (Ansai Prefecture, Shanxi). As a result, while rapid penetration of market economy has been making recent marriage more and more costly so that many indebted farmers are pushed to work outside villages, it is observed that basic social relationship such as reciprocal help among villagers as well as patrilineal/patrilocal marriage tradition including attached customs such as son preference is still held on.

Key words: marriage, tradition, social change, Loess Plateau, China